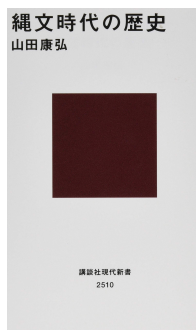


本棚

後沢 昭範



「縄文時代の歴史」

山田康弘著、講談社、2019年1月発行、323ページ、920円

●世は縄文ブーム

ここ何年か、起伏はありますが、根強い「縄文ブーム」の感があります。

特に2021年7月、「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコ（UNESCO）の世界文化遺産に登録され、地元は沸いています。独特な集団墓しゅうのキウス周しゅう堤墓群（千歳市）、巨大な掘立柱等で知られる三内丸山遺跡（青森市）、雪眼鏡を付けた様な遮光器土偶（重要文化財）で有名な亀ヶ岡遺跡（つがる市）、焼いた骨を使った祭祀跡のある御所野遺跡（一戸町）、ストーンサークルの大湯環状列石（鹿角市）など、1道3県17遺跡です。

また、少し前の2018年ですが、東京国立博物館で大規模な特別展「縄文…1万年の美の鼓動…」が開かれ、国宝や重要文化財を含めて、全国で発見・発掘された土器や土偶の逸品207点が展示され、35万人が訪れています。

更に、近年流行のスピリチュアルな世界でも縄文文化が注目され、少々軽い感じもしますが、遺跡は“パワースポット”などと呼ばれ、ブームに乗った若者達のいわゆる“聖地巡り”が盛んな様です。

縄文時代を巡っては、次々と新しい発見がなされ、年配者が学んだ教科書とは、年代・内容・広がり・影響等々、大きく変わっています。“日本文化の源流”とされる縄文の世界。最新の知見で描く“縄文時代の通史”とも言える1冊をご紹介します。

● 本書は

本書は、国立歴史民俗博物館の教授陣による古代史シリーズのひとつです。既刊に『弥生時代の歴史』があり、続版に『古墳時代の歴史』等が予定されています。

かなり学術的な雰囲気ですが、冒頭の「Q&A」で“基本的な概念と基礎知識”の分かり易い説明があり、そこだけでも、おおよその縄文時代のイメージが湧いて来ます。

構成は、〔プロローグ縄文時代前夜〕から始まって、〔1.縄文時代・文化の枠組み〕で大づかみし、〔2.土器使用の始まり…草創期〕、〔3.本格的な定住生活の確立…早期〕、〔4.人口の増加と社会の安定化・社会複雑化の進展…前期・中期〕、〔5.精神文化の発達と社会の複雑化…後期・晩期〕、そして〔エピローグ：縄文時代・文化の本質〕と、発展段階を辿っており、各時期の“見出し一言”から“縄文時代の流れ”が見えて来ます。

著者は総合研究大学院大学教授も兼ね、専門は先史学。著書に『つくられた縄文時代…日本文化の原像を探る』、『縄文時代…その枠組・文化・社会をどう捉えるか』等、多数あります。

本書を起点に、1万年余の長きに亘る縄文時代の姿、ほんの触りですが、日本文化の源流に分け入ってみましょう。晩期の土器には、何と“アズキやダイズ”、更に“粳”の痕跡まであり、「縄文農耕論」を巡る研究者間の議論を呼んでいます。

● 縄文時代・文化を一口で言えば

短く正確に言うと、少々硬いですが、“縄文文化とは、土器の出現（最古は16,500年前）から灌漑水田稲作が始まるまで（早くは3,000年位前、遅くとも2,400年前）の日本列島において、狩猟・採集・漁労を生業とし、様々な動植物を利用し、土器や弓矢を使い、本格的な定住生活を始めた人々が残した、日本列島各地における文化群の総称”であり、“このユニークな文化が展開した時期が縄文時代”という事になります。

縄文時代と一口に言っても、その期間は1万3千年もあり、地域差を伴いながら、徐々に徐々に進んで行きます。このため、研究者の間では、本書の“章立て”の様に、発展段階に応じて、(旧石器時代)⇒**草創期**〔16,500～

11,500年前頃（5,000年間）→**早期**〔11,500～7,000年前頃（4,500年間）〕
 →**前期**〔7,000～5,470年前頃（1,530年間）〕→**中期**〔5,470～4,420年前頃（1,050年間）〕
 →**後期**〔4,420～3,220年前頃（1,200年間）〕→**晩期**〔3,220～2,350年前頃（870年間）〕⇒（弥生時代）と、土器の様式によって6期に分けて整理されています。なお、世界史的に言えば、縄文時代は“新石器時代”に属します。

●縄文時代の気候は

話は地質年代に遡り、約260万年前から現在に至る「第四期」。氷期（寒冷期）⇔間氷期（温暖期）が繰り返され、ここ数十万年は10万年周期が続いており、今は間氷期です。

この周期的な変動には幾つかの原因が考えられ、複雑に絡み合っている様ですが、特に大きなものとして“地球の自転軸のブレが公転軌道を変化させ、日射量を変化させた”という天文学的な位置関係の変化が挙げられています。

氷期の気温は、現在より平均7～8℃低かったとされ、この変化が、高緯度の大陸を覆う超巨大な氷床や山岳氷河の発達⇔融解を招き、これによる海水体積の増減が、海水準の100mを超える上昇⇔下降、面的には大規模な海進⇔海退を引き起こして来ました。

という事で、直近の氷期（最終氷期）が終わって温暖化が始まったのは、今から15,000年程前。日本列島は、その少し前から縄文時代（草創期）に入っています。ただ、温暖化と言っても一本調子ではなく、13,000年前頃（まだ草創期）には厳しい寒さの戻りがあり、漸く11,500年前（早期）から本格的な温暖化が始まります。

7,000～5,900年前（前期）…気温は今より2℃程高く、温暖化のピークです。海水準も最高となり“縄文海進”を引き起こします。なお、当時の日本列島がそこまで温暖化したのには、南からの暖かい黒潮が蛇行せずに列島近くを直進したことが大きく影響しています。

4,300年前（中期末期～後期初頭）…極端な冷涼化があり、海岸線が遠ざかる“海退”が起きて沖積地が広がります。この海退の原因には、冷涼化もありますが、「日本第四紀学会」によれば、“先の氷床・氷河の融解によって増えた海水の重みで、海洋底が極めてゆっくりと遅れて沈降した結果、海洋底下のマントルが陸側に移動して陸域が隆起した”ことがあるそうです。地

穀変動をも引き起こすダイナミックな気候変動だったという事になります。

その後も2,500年前（晩期）…再び冷涼化した中で弥生時代を迎えます。

●その中で縄文時代・文化は

この様に、縄文時代の始め（草創期）は、まだ最終氷期の終わり頃でしたが、早期に入る頃は急速に温暖化が進んで海水面が上昇し、沿岸部の地形や自然環境が大きく変化します。食料の種類も豊富になり、定住生活が始まって、沿岸部では貝塚が形成されます。縄文時代の2/3は草創期と早期です（9,500年間）。この頃の人口は推定2万人程。

続く前期は最も温暖化が進み、海水面は今より3～5m上昇し、関東では、栃木県南部まで海が入り込んで“古東京湾（現在より70km奥）”を形成します。いわゆる“縄文海進”です。遺跡数も増えており、人口も10万人程になって“縄文文化の発展期”とされます。

更に中期になると、住居100棟以上の大集落も現れ、人口も増えて縄文時代ピークの26万人程。“縄文文化の高揚期”とされ、この頃の土器（火炎形土器等）や土偶が、今日の縄文時代のイメージを形作っています。

中期の末から後期の始め頃、極端な冷涼化が起きて人口は減少に転じます。遺跡数も大幅に減り、大集落は消えて小集落ばかりになります。この時期、集落や墓の在り方、社会構造や精神文化にも変化が窺え、“縄文文化の変容期”とされます。更に後期の後半には、特別な墓が作られるなど、単純な平等社会とはやや異なった状況が見られる様になります。

続いて、精巧な土器や土偶（遮光器土偶等）が生み出された時期が晩期で、人口は推定8万人程度です。

この後、新たに渡来して来た弥生人による灌漑水田稲作を受け入れながら、弥生時代へと移り、階級を発生させ、初期国家への道を歩む事になりますが、この変化は全国一律ではなく、およそ3,000年前の九州北部から、時間差・地域差を伴って徐々に広がって行ったものと考えられています。この辺り、どの時点までを“縄文時代晩期”と捉えるのか、もしくは“弥生時代早期”と位置付けるべきか、これまた議論のあるところの様です。

●縄文人はどんな人？

日本列島域にヒトがやって来たのは4万年程前。ヒトの活動の痕跡は最終

氷期まで遡ります。彼らの移動・渡海ルートは、西回り（朝鮮半島から北部九州へ渡海して）、北回り（沿海州からサハリン経由で北海道へ徒歩で）、南回り（南西諸島を島伝いに北上して）の3つが考えられています。文化的には後期旧石器時代です。

その後が続くのが縄文時代です。では、縄文人は誰なのか？ これまでは、人骨や土器等を発掘して観察する考古学と古人類学の手法で研究されて来ましたが、近年、DNAから歴史を読み解く遺伝学的研究が盛んになりました。

縄文人は“形態的には東南アジア人に近い”が、“遺伝的には北東アジア人に近い”とされていましたが、「国立科学博物館」によれば、最新の核DNAの分析からは、縄文人は、それらの何れにも属さず、“もっと古い時代に、東アジア人の共通祖先から分かれて独自の進化を遂げた集団の可能性”が強いとされ、今後の更なる解析が待たれます。また、これとは別にミトコンドリアDNAの分析から、“縄文人には南北二つの系統がある”とする報告もあり、旧石器人の後裔説を補強します。これまで、形質的には単一とされて来た縄文人ですが、遺伝的に詳しく見ると地域性・多様性があった様です。

そこで、縄文人の姿ですが、出土した人骨からの推定では“小柄（男160cm位、女150cm弱）ですが遅しく”、顔は“彫が深く鼻が高い”とされ、この時期、世界で同じ顔付き・形質の人々は見当たらず、かなりユニークな存在だそうです。この事は、縄文時代には、日本列島域以外からの大きな人的流入と混血が無かったことを意味します。

なお、縄文人に続く“渡来系弥生人”は“高身長で平たい顔立ち”だそうです。

●縄文と言えば土器ですが

縄文式土器の名称は、1877年、大森貝塚（東京）を発見した米国の動物学者モース（Edward Sylvester Morse）が、出土した土器の縄目模様注目して“cord marked pottery”と呼んだ事に由来します。

土器を使う様になった時点から縄文時代の始まりとされますが、土器の歴史的意義は“煮沸具（鍋）”として“食生活の多様化と量的拡大”をもたらした処にあります。

つまり、土器によって“長時間の煮込み”が可能になり、それまで食べられなかった硬い部位を柔らかくし、アルカロイド等の有害物質を除去・分解す

る等、より多くの食料資源の利用が可能になりました。また、デンプン質はアルファ化されて食べ易くなるとともに、複数の食材や塩を組合せて好みの味を作り出せる様になったと考えられています。お陰で、縄文人の食生活は格段に豊かになりました。1万年余の間、土器の様式は変化しますが、基本形は深鉢形で、出土品には煮炊きの煤やお焦げが付着しています。

●縄文人の食べ物は？

具体的な食料の種類と確保の仕方は、山間部と沿岸部では異なりますが、日本列島の四季の変化に応じて採集・狩猟・漁労を組合せ、工夫している様子が見えて来ます。別途の『縄文時代ガイドブック*』も参考に復元してみましょう。

〔春〕…フキ・ワラビ・ゼンマイ・ノビル等の山菜やタラの芽等を採取し、海辺ではハマグリ・アサリ等、河口・汽水湖ではシジミ等を採ります。

〔夏〕…最も漁労が盛んな季節です。海ではマダイ・クロダイ・スズキ等、川ではマス等、岸部近くに産卵に来たところを捕らえます。また、秋に掛けてアケビ・サルナシ・ヤマブドウ等の山野の果実類やハチミツ、更にカミキリムシの幼虫等の昆虫食もあったと考えられます。

〔秋〕…トチ・ナラ等のドングリ類、クリやクルミ等の堅果類の採集。ヤマノイモ・クズ・ワラビ等の根菜類の堀採り。“冬を乗り切れるか”が掛かっています。一部ですが、栽培植物の利用もありました。川を遡上する大量のサケも干物や燻製にして冬に備えます。

〔冬〕…鹿・猪等、狩りの季節です。主な狩猟道具は弓矢ですが、犬も使い、落とし穴猟や追い込み猟も行っています。

これらは、住居跡・貝塚・墓等の縄文遺跡の遺物から確認～推定されますが、特に低地遺跡からは、土器・石器・骨以外に、丸木舟・弓・石斧柄・木鉢・櫛等の木製品や編み物、漆製品、食用植物の遺存体等、有機質の遺物が発見されています。縄文人の年間を通じた計画的な暮らしぶりや生業、道具の使用方法など、リアルな生活場面が見えて来ます。

●縄文人は種を蒔いたのか？

ここで気になる“栽培植物”ですが、実は、縄文式土器の表面には、製作の際、粘土に入り込んだ植物種子の痕が穴（圧痕）になって残っています。

焼成時に中身が焼けて無くなった空洞ですが、シリコンを流し込んで型を取り、顕微鏡で観察・同定します。

この方法により、“ダイズ・アズキ・アワ・ヒエ・イネ・エゴマ・ハトムギ等”が見付かっています。特に豆類の圧痕は多く、“縄文人の周囲には豆類が日常的に存在していた”ことを窺わせます。更に、年代別に比較すると、中期以降、“豆類の粒が大きくなっている”そうです。これらの事から、“豆類が栽培されていたのは确实”とされています。ただ、それが大きく広がって社会構造を変化させる（階層の発生等）までには至っていなかった様です。この辺りの捉え方が、一時話題になった、豆類を主体とした“縄文農耕論”の評価の分かれるところです。

この他、“クリ”はアク抜きせずに食べられる食料として、また竪穴式住居の建材として重要でしたが、花粉分析等から、集落の形成と共にクリ（林）が多くなることが確認されており、集落の周囲にクリを意図的に植栽し、群生させて管理していたと考えられています。

●縄文ブーム…過度の美化は慎重に

最後に著者は言います。「近年、縄文人を“サステナブルでエコロジカルな考えを持ち、自然と共生した人々”と評価する向きもあるが、少ない人口で定住生活を行い、食料は100%自然の恵みに依存していた縄文人には、自然と共生する以外のオプションは無く、“自然と共生する”という発想事態が極めて現代的なもの。極少ない人口で、石器をふるっての営み。“人々の自然の改変・開発や自然からの収奪より自然の回復力が勝っていた”というだけのことで、“人間本位の姿”は、本質的には現代と何ら変わらない」と。

また、縄文時代を“お互いが支え合い助け合って生きて来た“ある種のユートピア”として語ろうとする論調に対しても、「極端に少ない人口だったという観点が抜け落ちており、個人的に多少の軋轢はあっても、基本的にはいつの時代も同じであり、“過度の美化”には慎重でありたい」と。この時代を掘り下げて来た著者の目は冷静です。

ところで、本書の主人公・縄文人は、その後どうなったのでしょうか。「弥生人、更に後世の人々の中に、文化と共に吸収され、取り込まれていったというのが実情として一番正しいのだろう」と著者は言います。ちなみに、最近の研究では、核DNAの分析結果から、“現代日本人は中国大陸の人々と縄

文人の間に位置し、両者の混血によって成立した”とされ、“本土日本人は核DNAの約10%が縄文人由来”だそうです。

なお、縄文時代・文化にご関心の方は、以下の書籍にも興味を引かれるかと思えます。

「縄文時代ガイドブック」勅使河原彰著、新泉社、2013年2月（見易いビジュアル版）。

「マメと縄文人」中山誠二著、同誠社、2020年5月（土器のマメの圧痕から説き起こす）。

「縄文」東京国立博物館編集、2018年7月（…特別展…1万年の美の鼓動）。